



冬の寒さで作れる野菜は限られています。今回は、昨年を振り返り、寒い時期だからこそできる次の野菜づくりに向けての策を考えてみましょう。

■土の物理性を改善

冬の寒さを利用した「寒起こし」をすると、掘り起こした土が冷たい空気にさらされ、土の中の水分が凍ったり溶けたりを繰り返すことで、土の物理性の改善につながります。また、土の中に住む病原菌や害虫・雑草の種などを死滅させる効果も期待できます。寒起こしは、粗く深く行うことがポイントです。深さ30cm程度、土の塊ごと掘りあげて冷たい空気にさらすようにしましょう。

水はけの改善も大切なポイントです。

ントです。作物を栽培している時期に大雨が降った後、畝の間にいつまでも水たまりが残っていると、根に酸素が行き届かず、根腐れなどの症状が起こってしまいます。畝を高くする・明渠^{*}を設けるなどの対策が有効ですが、冬の間にも準備できることがあります。土を掘ってからスコップを深めに差込み(15〜20cm程度)、水はけが悪い層に亀裂を入れておきましょう。深く亀裂を入れすぎると、地下水が上がる場合があるので、15〜20cmにとどめておきましょう。亀裂を入れる間隔は20〜30cm程度とし、終わったら土を埋め戻します。

※明渠(めいきよ)とは、地表に設けられた、上部が開放された排水用の溝や水路のことです。

■土の化学性をチェック

まずチェックするのは土のpHです。酸性・中性・アルカリ性を作付け前に計測することは大切です。簡易な計測器(写真参照)を常備しておくとう安心です。また、窒素・リン酸・カリなどの栄養分が、土にどのくらい残っているのかを調べるためには土壌診断が有効です。



■次の作付け計画を立てる

どんな野菜をどこに植える(播く)のかを大まかに決めてみましょう。植え付け(種まき)から収穫終了までを計画しておくことで、連作障害などを避けることにもつながります。例えば、昨年キャベツ(アブラナ科)を植えたところにはトウモロコシ(イネ科)を播いてみるなど、昨年を振り返り、科を変えて作付けするように工夫してみましょう。

また、連作障害を避けるための方法として、接ぎ木苗を使うことは有効です。この他、抵抗性や耐病性を持つ品種を選ぶことも重要です。種苗会社のホームページやカタログ、種袋などで確認しましょう。